



学生のパワーを 最大限に引き出す

創立130周年に向けて——「考動力」あふれる人材の育成拠点に

- 池内 啓三 ・理事長
- 楠見 晴重 ・学長

2012年10月1日開催の学校法人関西大学理事会で、池内啓三理事長が選任された。学長2期目に入ったばかりの楠見晴重学長と同じく、池内理事長も関西大学一筋に歩んできた。母校を知り尽くしている2人の舵取りで、学生が生き生きとパワーを発揮できる近未来の学園を目指す。

◆学生の「心に火をつける」

楠見 私はこのたび、関西大学学長として2期目を務めることになりました。新たに就任された池内啓三理事長と力を合わせて、母校・関西大学のために尽くす所存です。今日は関西大学の課題や将来の大学像について語り合い、お互いの考えを共有し発信していきましょう。まず、理事長に就任された抱負からお聞かせください。

池内 事務職員として40年間、常務理事と専務理事として8年間、関西大学に奉職し、この大学の良い部分も弱い部分も分かっているつもりです。長年、学生と身近に接する職場におりましたから、学生が持っているパワーを最大限に引き出すことが大学の使命だと思っています。しっかりした力をつけさせて、社会に送り出したい。先輩が活躍することによって後輩がそれに続くというような、プラスのスパイラルを実現する学園づくりが目標です。

もちろん、教職員の総力を結集して教育力を高めること、また安定した財政基盤を確立するために注力することは言うまでもありません。

楠見 教員に対して望むことは？

池内 大学は教育と研究が主体です。先生と学生、教える者と教えられる者が中心となり、事務職員がその教育・研究の支援体制をどう作るかで、活力に満ちた学園になるかどうかが決まってきます。先生に生き生きしてもらわないと、学生も生き生きしません。学生が秘めているパワーを引き出していきたい。「心に火をつける」という言葉がありますが、彼ら彼女らの心に

火をつけてやると見違えるように変わります。「高校時代とずいぶん変わったな」と、自他共に感じられるように、先生方が創意工夫をして何か仕掛けを考えていただけたら、職員はそれをサポートします。

◆逃げないで難事に立ち向かう

楠見 池内理事長の自己紹介も兼ねて、学生時代の思い出などをお話してください。

池内 文学部新聞学科の勉強よりも、中学・高校と続けてきたバスケットボールに熱中しました。私が入学した1961年ごろは、体育館が千里山にはなくて天六学舎にありました。暇があれば練習していましたね。3年次生になると千里山に今の東体育館ができて、そちらで練習するようになりました。東京オリンピックが開催された4年次生のとき、バスケットボールの学生連盟の仕事などを手伝っていたところ、体育の岩野次郎先生から関西大学の職員になれと勧められたのが就職のきっかけです。

まもなく全国的な大学紛争に巻き込まれていき、関西大学でも学生に関西大学会館などを封鎖され、職場を奪われる事態に陥りました。大学をいかに守るか、職員集団でいろいろ考え議論しました。セクト間の対立や内ゲバ、右と左の争いなども激化し、けがをした学生を救い出すようなこともありました。ここは大学だから言論で闘え、と言っても通じませんでした。

その後、第2部(夜間部)の学生課長時代に、差別文書に端を発した人権問題で学内が揺れたことがあります。問題が起こるたび、何事も逃げたら絶対に追いかけてくるということを学びました。私はしんどいときこそ、逃げないで飛び込んでいくという主義でやってきました。

楠見 それで、理事長就任の挨拶の際に、何事からも逃げないで難事に立ち向かうということを強調されたのですか。

池内 はい。国際化の旗印のもとに留学生寮として学生国際交流館・秀麗寮を設置したときは、門限や食事の内容をめぐって徹夜で話し合ったこともあります。総務局長時代には、職員の人事制度改革に力を入れました。しっかり評価をして、PDCAサイクルを回していく制度を数年がかりで作りました。その経験が長期ビジョンを具現化するための長期行動計画の策定につながっていると思っています。

◆教育の質の向上と国際化を推進

池内 楠見学長は学長職2期目を迎えられましたが、改めて抱負などをお聞かせください。学長に就任されてから、毎朝ジョギングをなさっているそうですね。

楠見 ええ。海外出張に行くときも、ジョギング用の靴と服を用意して走っています。健康的で、とても気持ちがいいですよ。関西大学という大きな組織を動かしていくのは、体力勝負の面もあります。13学部と12研究科、3専門職大学院が参加して月に2回開いている学部長・研究科長会議では、この3年間に百数十件の審議案件がありました。私は基本的に、全学一致を求めます。案件の成立には、3分の2以上の賛成でもよいのですが、時間はかかっても、全学的に納得していただいて大学をも

■対談



Keizo IKEUCHI

「心に火をつける」という言葉がありますが、彼ら彼女らの心に火をつけてやると見違えるように変わります。「高校時代とずいぶん変わったな」と、自他共に感じられるように、先生方が創意工夫をして何か仕掛けを考えていただけたら、職員はそれをサポートします。

り立てていくために、今後も全学一致の基本方針でいきたいと考えています。

この3年間、教育の質の向上に努めてきましたが、さらに継続して発展させていくつもりです。具体的には、マスプロ教育をなくしていくこと、ST(スチューデント・ティーチャー)比の比率を下げていくことです。また、学生の学修時間の確保にも取り組む必要があります。例えば、単位認定に際しても、90分の授業には予習・復習それぞれ90分の時間を勉学に充てなければいけません。日本の学生は、勉強時間が諸外国に比べて少ないのが問題です。

池内 楠見学長は就任以来、ハブ大学構想を掲げて国際化を推進しておられます。やはり、国際化が大きな課題だと思います。

楠見 アジア・太平洋地域のハブ大学としての機能を果たすためには、国際化教育プログラムを充実させて、優秀な留学生に来てもらわねばなりません。関西大学は南千里国際プラザを設置し、今年4月から留学生別科を開設しています。それらを有効に活用して、意欲ある留学生に関西大学の学部や大学院への

入学を果たしてもらいたい。それによって、日本の学生と留学生が学内で国際理解を深めるような教育プログラムを実現することが可能になります。

また、本学はタイ王国司法府と協力基本協定を締結し、裁判官と裁判所職員を対象とした研修を行っています。あるいは、オーストラリア政府が派遣する日本語教師を対象とする日本語・日本文化研修も実施しています。現在、留学生は約700人ですが、短期語学研修なども含めて、2000人ぐらいにもっていきたいですね。

さらに、大学院をより充実させる必要があります。それによって高等教育の使命を果たし、大学の研究力がアップします。関西大学には、独創的な研究や世界的に優れた研究があるので。それをもっと世界に発信して大学のプレゼンスを高めていきたい。それが、アジアからの優秀な留学生を呼び込むことにつながります。

◆後半5年間にに向けて長期行動計画を見直す

楠見 学校法人関西大学は、2008年に長期ビジョン「KU Vision 2008-2017」を策定し、「社会を見つめ、変化に挑む。『考動』する関大人が世界を拓く。」という方向性を定めました。さらに、池内理事長がプロジェクトリーダーとなり、長期行動計画を策定しました。5年目の今、どのように評価されていますか。

池内 長期行動計画の策定から4年間が経過したので見直し、後半5年間にに向けて検証を重ねてきました。行動計画は8分野(「教育改革」「研究改革」「社会連携・生涯学習改革」「国際化」「学生支援改革」「大学入試改革」「併設校の教育改革」「組織・運営基盤の構築」)にわたり、それぞれ検証して達成率を数値化しています。20%ぐらいの達成率ですが、継続事業が約50%あり、引き続き取り組んでいます。もちろん課題はたくさんありますが、組織として関大が動いている、頑張っているいろいろ進んでいるという評価につながっていると思います。

楠見 教育の成果を数値で表すことはなかなか難しく、時間がかかります。研究力については、一つの見方として、外部資金をどれだけ確保していくかという点から見ることができます。科学研究費補助金の獲得は今年、医歯系を除く全国私立大学の中で、前年の6位から4位に上がりました。

◆関西大学の知的源流の一つ「泊園書院」

池内 本学は2016(平成28)年に創立130周年を迎えます。それに合わせて、私の理事長としての任期は4年間です。この1年以内にどういう周年事業を展開するかを明確にしなければならず、いろいろ議論をしています。従来、同事業といえば、施設・設備を中心とした事業を行ってきましたが、もうハードの時代は去り、これからはソフト中心の周年事業になると思われます。

例えば、なにわ・大阪文化遺産学センターが展開してきた活動を中心に、大阪をもっと活気づけられるような事業であれば、大阪の大学として発展してきた関西大学の周年事業にふさわしいのではないのでしょうか。大阪に住む人々が再チャレンジできる教育の場、関西大学の40万人を超える校友も利用でき

る「学び直しの場」ができないかと考えているところです。

かつて天六学舎は、向学心に燃える若者たちの学び舎でした。今の日本では、いったん実社会に出てしまうと再チャレンジできる社会システムがありません。学び直しができて、大阪を活性化させる、ひいては関西大学も活性化できるようなものが大阪の都心部にできないか、検討の余地があります。

楠見 そうですね。国際的な教育プランを進めるとともに、地域性を大事にしていかねばなりません。1886年に関西法律学校としてスタートした関西大学は、大阪に育てられてきました。

関西大学の揺籃期の教育とかかわりが非常に深いのが、幕末のころに懐徳堂をしのぐ大阪最大の私塾として栄えた「泊園書院」です。四国高松藩出身で、長崎に留学して中国語を学んだ藤澤東暎が1825(文政8)年、大阪淡路町に開いた漢学塾です。その孫の藤澤黄坡は、関西大学専門部文学科教授を務め、1948年に本学最初の名誉教授となりました。黄坡の義弟の石濱純太郎は、関西大学文学部史学科教授で、本学最初の文学博士号取得者です。貴重な資料が多い「泊園文庫」の本学図書館への寄贈、東西学術研究所の創設、文学部東洋文学科の開設など、本学における東洋学の発展に尽くされました。

泊園書院で学んだ方々は、幅広い分野で活躍されています。不平等条約の改正で知られる外務大臣の陸奥宗光、検事総長・日本大学初代学長の松岡康毅、英吉利法律学校(現中央大学)の創立者の一人である山田喜之助、森下仁丹創業者の森下博、武田薬品工業創業者の武田長兵衛など。作家の藤澤桓夫は、藤澤黄坡の長子です。

私は今後、大阪に根付く関西大学の知的源流の一つを泊園書院に求めていきたいと考えています。そして、関西大学には、その他に社会科学、自然科学分野にも多くの「なにわ・大阪」に関する知的資源が蓄積されています。これらを有効活用することによって、地元大阪の政治・経済・文化、そして科学技術発展のために貢献できると思っています。それは人文科学に限らず、社会科学、自然科学を含めた総合科学としての「なにわ・大阪学」の拠点です。

◆「考動」する関大人として世界を拓け！

楠見 いろいろお話をしてきましたが、最後に学生たちに向けて、池内理事長からのメッセージをお願いします。

池内 関西大学の一番の特徴は、多様性にあると思います。全国各地から、また留学生も含めて、多数の学生が集まっており、切磋琢磨する環境が整っています。人とぶつかり意見が対立することを恐れず、先輩たちの良き伝統を受け継ぎ、関大の学生はやっぱりパワーがあると言われるように、何事にも積極的に挑戦して未知の世界を拓いていただきたい。そのパワーが卒業してからも、社会をリードする原動力になります。学生時代にこんなことをやったと言えることが、社会に出たときに必ず生きてきます。

楠見 やはり長期ビジョンに掲げているように、「考動」する関大人として世界を拓いてほしい。そのためには、自分の専門分野はもちろんのこと、専門以外にも興味をもって学び、幅広

関西大学には、独創的な研究や世界的に優れた研究があるので。それをもっと世界に発信して大学のプレゼンスを高めていきたい。それが、アジアからの優秀な留学生を呼び込むことにつながります。



Harushige KUSUMI

い知識を身につけてもらいたい。福島原発事故の根本的な要因の一つに、科学が余りにも細分化されてしまっていたことが挙げられます。総合科学的に、全体を見るような目を養ってほしい。

大学の最も大きな使命は、有為な人材を世の中に送り出していくことです。池内理事長には、本学が「考動力」あふれる人材の育成拠点として揺るぎない大学になるように、強力なバックアップをお願いいたします。

池内 啓三(いけうち けいぞう)

1943年田沼州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科卒業、学校法人関西大学に奉職。92年評議員、96年総務局長、2000年理事。法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年学校法人関西大学専務理事。12年10月理事長に就任。

楠見 晴重(くすみ はるしげ)

1953年大阪府生まれ。78年関西大学工学部土木工学科卒業、81年同大学院工学研究科博士課程後期課程中途退学。82年関西大学工学部助手。90～91年英国 Imperial College 留学。関西大学専任講師、助教授を経て、02年教授。07年環境都市工学部教授となり、同年4月から学部長に。09年関西大学学長に就任。文部科学省大学設置・学校法人審議会委員、一般社団法人日本私立大学連盟常務理事、公益財団法人大学基準協会理事、土木学会フェロー会員。主な共編著書に「地環境情報学 地下を診る最先端技術」「アジア古都物語 京都一千年の水脈」など。